

噫止
とは何だ
ろか
或る寓話小説

リチャード・セネット
栗原行雄訳



晶文社

著者について

リチャード・セネット

一九四三年シカゴ生まれ。シカゴ大学を卒業後、ハーバード大学大学院でデイヴィッド・リースマンのもとで社会学を研究。26歳ごろからすぐれた都市論を発表、気鋭の社会学者として内外の論壇から注目される。現在は、ニューヨーク州立大学人間科学研究所の所長。著書に、『無秩序の活用』（邦訳、中央公論社）『権威への反逆』（邦訳、岩波書店）などがある。

訳者について

栗原行雄（くりはら・ゆきお）

茨城県生まれ。早稲田大学英文科卒業。現在、早稲田大学助教授。

訳書「マードック」「ユニコーン」（晶文社）

『砂の城』（集英社）、J・バージャー「G」（新潮社）ほか。

嘘^{うそ}とは何^{なん}だろうか——或る寓話小説

一九八九年五月一五日発行

著者 リチャード・セネット

訳者 栗原行雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一・二二

電話東京二五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

壮光舎印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

口也
止
とは何だ
ろが
或る寓話小説

リチャード・セネット
栗原行雄訳



晶文社

嘘とは何だろうか

或る寓話小説

リチャード・セネット

栗原行雄訳



晶文社

Richard Sennett :
THE FROG WHO DARED TO CROAK
Original Copyright © 1982
by Richard Sennett
Published in Japan, 1989
by Shobun-sha Publisher, Tokyo.
Japanese translation rights arranged
with Richard Sennett
c/o Deborah Rogers Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo.

〔目次〕

I	出発点	13
II	グラウの最初の革命	83
III	長老たち	149
IV	戦時中の日記	183
V	蛙は鳴き声をあげる	235
	訳者あとがき	264

ブックデザイン 平野甲賀

嘘とは何だろうか――或る寓話小説

三人の友人――

ウィリアム・ショックロス

ヴィクトリア・グレンデニング

デイヴィッド・リーフ

にこの本を捧げる

一九七三年の三月五日に、使いの者がわたしのオフィスにあらわれ、大きな小包を置いていった。小包には、発送人の住所が書かれていなかったし、切手や消印もなかった。小包を開いてみると、中にもう一つの包みがあり、表につきのように書いてあった。「フエンティマン様へ。これはチボル・グラウから託されたものです。あなたにお届けするようにと、死ぬまぎわに頼まれました。あなたはこれを出版したいだろうから、ということでした」署名はなかった。この内側の包みには、さまざまな紙切れ、古い封筒や本のカバーなどが入っており、どれにも、みごとな筆蹟で、びっしりと文字が書きこまれてあった。また警察の調書と新聞の切り抜き、それに公文書も数種類入っていた。これはすべてチボル・グラウが書いたものか、チボル・グラウに関するものだった。

出版にたずさわる人間は、望みもしない原稿の爆撃を、よくくらうものだ。わたしにしてもこのグラウという名前を目にとめなかったら、小包を屑箱に投げこんでしまったに違いない。わたしの前任者が、哲学的なテーマを扱ったグラウの本を、三冊ほど、社から出していた。それにわ

たし自身、グラウの講義をかつて聞いたことがあり、彼の生涯について、わずかながら知識があった。第一次世界大戦の末期に、母国ハンガリーで革命運動にかかわった哲学者であること。一九二〇年代の後半にモスクワに行ったこと。巧妙な身の処し方と知的妥協によって、スターリンの粛清をうまくきり抜けたこと、などである。わが社が彼の本を出した一九四〇年代から五〇年代にかけて、ここイギリスの書評では、コミュニズムに損なわれた、すぐれた才能の持ち主というのが一般的な見方であった。

わたしが受けとった素材は、当人の手で整理された、グラウ自身の物語で、哲学に関するものはほとんど含まれていなかった。もっと個人的で、しかも衝撃的な内容だった。そこには恐怖や絶望と苦闘する、一人の裸の人間の姿があらわれていた。この雑多な紙切れや、手紙や、文書を、どういったていさいで出版してほしいのか、それを推測する鍵をグラウは一つだけ与えてくれた。厳密ではないけれども、年代順にナンバーがふつてあったのである。封筒の裏や、それに類する紙切れを使った、グラウのこの「私的な」書類は、すべてドイツ語で書かれている。その翻訳に関する責任はわたしにあり、ハンガリー語で書かれた手紙や公文書の翻訳は、ポール・セントイボシユ教授の手をわずらわせた。編集上の注は最小限にとどめることにしたが、編者の裁量で、このドキュメントを五部に分けたことと、本の題名に、勝手ながらある詩の一節を借用したことを——その正当性は認めていただけるものと思うが——ここにお断りしておきたい。

一九七六年七月

ロンドン
パークス・アンド・フエンティマン出版社
ハーバード・フエンティマン

I

出
発
点

これは若い人たちに、わたしがよく言っていることだけれども、われわれは生きのびるために嘘をつかねばならない。しかし嘘とはそもそも何なのか？ 偽りを語る人間は、真実を覆いかくすために、まず真実を知らねばならない。存在論的に言えば……いや、そういった論議で本筋を見失ってはならない。わたしはただ、簡単にこう言おう。われわれは生きのびるために嘘を言わねばならない。が、正直でありたいと思うときが、いずれはくるものだ（ちやうど何年もフランス語を話さずにいたあとで、ふいに復習したくなるように）。ただ、自分の考えていることや、自分がどんな人間であるかを語るために。もしそれが可能でさえあるなら。

たとえば、ある友人が西側から、わたしについても論じられている一冊の本を持ちかえった。『一九二〇年代の左翼的哲学者たち——マレク、グラウ、クリス』という題名で、三人の名前の下には、リチャード・プライベルという著者の名があり、わたしたちの名前の上には——西欧圏外